

その十四 再会

課長の長い電話が終わった。溜息のあと受話器を置くとうつつむく。しばらくして煙草に火をつけて一服すると何かを思い出したのように顔を上げる。

「二世くん。ちよつと」

公害啓蒙リーフレットに使う写真の選定をしていたが「ハイ」と応えて課長の前に立つ。

この四月から、ここ、豊中市役所に勤務している。滅多にない中途採用試験に運良く合格した。経歴がものを言ったのか、広報課に配属された。まだ慣れてないが春の日差しが気怠い。

「二世くん」

少なくなつた頭の毛を^{イダワ}労るように撫でながら課長が続ける。

「確か、『守電通』……じゃなかった『モリ・P R……』に務めていたな」

気怠さが消えた。「守電通」と言うのは「モリ・P R・コーポレーション」の旧社名だ。

「明日、モリ・P R……何だったか。とにかくそこへ行く。同行してくれ」

「退職した会社に行くのは勘弁してください」

「なんや、首になつたんか？」

「そうではありません……」

無神経な課長を睨みたかったが、逆に睨まれる。

「じゃあ、なんでや」

返事をしないので課長は老眼鏡をずらして小さな声で続ける。

「実はな、さっきの電話……」

煙でしみた目を細めて短くなつた煙草を吸う。

「府会議員の中原先生からだな。この先生の娘はんの旦那が守電通の……知ってるやろ」

別に驚きはしない。「結婚したのか」と言う程度の感慨しか起こらない。だから反応しなかつた。

「どうに万博も終わつたし、オイルショックが起こりそうやから広告業界も大変らしい……」

それにしても、なぜ前職の会社と関わりを持たなければならないんだ。俺は今、公務員だ。

「当市の広報関係の印刷物は『守電通』時代からのお付き合いで……オイ、聞いたるんか」

「ハイ」

モリ・PRと豊中市や広報課との取引内容は知らないが、どうやら競争入札ではないようだ。

一言で言えば「癒着^{ユウセツ}」だ。いずれにしてもモリ・PRを庇^{カバ}う義理はない。当然同行したくないから思い切つて意見する。

「と言う事は、随意契約^{ズイイ}なんですか」

課長がうろたえる。俺を世間知らずの新卒採用と思っていたようだ。シワが初老の額に刻まれる。

「確かに『守電通』時代、不明朗な取引もあった……かも知れんが、前任者がした事。わしは関係ない。だから同行してくれ」

筋が通った説明ではない。逆らって首になっても構わない。就職したばかりで失うものはない。

「顔見知りの者が一杯います。それでもよろしいでしょうか」

いつの間にか係長が俺の横に立っていた。

「二世君は配属されたばかり。私が行きましよう」

配属日の歓迎会でこの係長から広報課の事情を聞いていた。議員の陳情をどう裁くのか、どう回避するのか。「公務員も結構大変なんだ」と妙に感心した。

席に戻る。のどかな春の陽は隣のビルに隠れて影を残すのみ。春先特有の乾いた空気が鼻から口へ抜ける。ちびつた赤エンピツ、青いインクのシミ、そして伸びた爪。影の中に俺がいる。

*

まだ四月早々。大学は春休み。酒屋で安物のウイスキーと乾き物を買ってボロ家に帰った。ビートルズのレコードをプレイヤーに載せる。そして万年床という名のベッドでボヤーツと天井のシミを眺める。いつもなら、侘しい生活を送る俺を優しく包む音楽も白々しい……と言う

よりただの音として耳を通り過ぎる。

グツと水割りを飲み干す。アルコールが全身に行き渡る。

常識が前面にありながらその常識が通らない世の中——酒が俺を哲学者に仕立てる。まさしく、こういう状態は逆様^{サカサマ}。逃避するための酒が逆流する。

押し付けがましい課長の顔が浮かぶ。どう考えて命令したのか分からない。とにかく同行を回避できなかった。高卒の課長は市職員として一途に勤め上げてきた。まもなく定年を迎える。かなり先のことになるが俺も守^{モリ}の会社で一生を終えるつもりだった。他の選択肢なんか考えた事がなかった。でも断ち切った。それなのに待ち構えていた偶然が俺を縛ろうとする。

課長のように長い経験から得た理性——そんな理性の過信そのものが酔態^{スエタイ}に見える。けれど意地を振り回して啖呵^{ダンカ}を切るのも立派な酔いどれ状態。

誰も彼もが酔い潰れたこの世の中。素面^{シラフ}だったら恥ずかしくて歩く事さえ出来ないはず……と説法したところで、これも酔っ払いの戯言^{ウソコト}に過ぎない。

事実は小説より奇なりと言うが偶然とは恐ろしい。逢った事、別れた事。愛した事、憎んだ事……因果めいた物語に手心が加えられた現実が震えるほど残酷な結末を作り上げる。変転、推移、位相など単なる偶然なのに、糸を操る者が居るような不気味な気配。強いられるのか？ 偶然を否定してもこの強制の鎖から逃れる事はできない。悟りが本業の坊主までが酔っ払う世の中。鎖を断ち切ることは不可能。

守とはサツパリ関係を断ち切った。それなのに強いられる。川の流れが人生なら様々な滝は決断か？ 烏来瀑布のようなダイナミックな滝でも所詮、上から下へ落ちる流れのひとつ。そこに決断は存在するのか。決断したと錯覚しているだけ。酔態そのもの。かと言って酔わなければやって行けない。

でも無性に恐ろしい。恐怖に限りなく近い不安は何故に……永久を乞う有限の身だから生じるのか。どうやら不安は偶然がもたらすものではなさそうだ。

人間なんて弱くて貧しいもの。人間の弱さ——「醜くさ」までもが清く美しく感じられるほどの弱さ。貧しさ——大統領、聖者、富者、学者までが哀れで滑稽に見える貧しさ。その先にあるもの——淋しさ。そう、淋しい事だけは確かだ。

生きる素晴らしさを発見するなんて、ありえない。生きたいという願望など淋しさでいつも曇ってしまう。単なるセンチメンタルな理想家の夢に過ぎない。しかし、そんな理想家を嘲笑えようか。

隙間風のような淋しさを呼び込むモノはいったい何か。偶然？ 必然？ どちらも捕らえどころがない代名詞。それら是对峙しながらモノの内と外を示すだけ。そんなモノを俺は大事にしてきた。まさに酔っ払いの寝言、そう酔眼だ。何一つ確かなモノなんてない。確かなモノなんて目にする事はできない。何もかも……？

でも、欲しい——安心できる何かを。火花が散るような一瞬でありながら永遠なるものを。

雨音が聞こえる。ポツンという音がした。スタンドの灯を入れる。またポツンと……狭い部屋が広く感じられるほどの小さなスタンドの光。貧弱な光を受けて本棚の小さな緑泥片岩の欠片が輝く。その横には分厚い封筒が置かれていた。

「波江……」

脳裏に瀬戸島の小さな港が浮かぶ。撮った写真の一コマ一コマが甦る。あの時、偶然、波江の愛の姿を見た。偶然？ 俺は偶然に翻弄されている。センチメンタルな理想家とは俺の事か。でも確かに見た。波江は決断した。瞬間的に彼女は永遠なるものを抱きしめた。この欠片は波江そのもの。普段は何の変哲もないのに濡れるとハツとするような鮮やかな緑色になる。冬見……現実の邪悪な拡散よりも夢の中ですべてを凝集させて岩手山の麓から一筋の白い煙となつて天に昇った。

オヤジ……子供相手とは言え、いや子供相手だから精一杯生きている。女の子と指切りげんまんしたオヤジは本当にうれしそうだった。

知秋……あんなに慕ってくれた。果たして別れる必然性はあったのか。

そして夏子……燃え尽きるような恋をしたが永遠につながることはなかった。それどころか、今、お先真つ暗な俺の人生に守と共に立ちほだかる。

掌の緑泥片岩の欠片に落ちる雫……単なる雨漏り。分厚い封筒を手にする。この封筒は六甲

*

駅前ですから受け取ったものだ。

美英子……その六甲駅に来なかった。

*

勝手知ったるモリ・PR本社の地下駐車場とは言え、初めて運転する乗り慣れない役所のボロ車、腹をくくったとは言え不安だらけで汗ばんだ掌、ハンドル操作がうまくできない。しかし、いつの間にか車から降りていた。いつの間にか鞆を小脇に抱えて階段を上がっていた。ただ、課長に「こちらです」と案内する気遣いは忘れていた。

昔の仲間の意外そうな声の中、苦笑を返事にして通り抜ける。そして春の光が差し込む割には冷え冷えとした社長室に入った。出迎える守キリがいた。その横には夏子、いや、守夫人が守共々に課長に頭を下げる。しかし、二人とも俺には驚かなかった。

「広報課、課長の田畑です」

俺は課長の背中からこれ以上、下がれないところまで後ずさりする。守と課長の名刺交換が始まる。配属されたばかりの俺はまだ名刺を持たされていない。ある意味助かった。

守は課長にソファを勧めて座るのを待って腰を下ろす。課長がすぐ口火を切る。

「ご存じかと思いますが、昨日、社長様のお義父様……中原先生から……」

世間話から始まると思っていたのか守の表情は変化すると言うより驚きに近かった。それなりの情報収集していたはず。だが、お膳立てまでは知らなかったようだ。

——でも夏子がいる

お茶が運ばれてきた。そのお茶を夏子がテーブルに置く。俺の分は端に置かれた。茶碗から湯気が出る。何と重苦しい湯気なんだろう。

「ありがたいお話ですので、ここでご返事させていただければよろしいのでしようが……わざわざお越しいただいて誠に失礼なのですが……」

言葉が空回りしている。さすがの守も返事に窮する。

「……義父ちちが気を回して課長様に連絡したようですが、私もついこの間、社長に就任したばかり。返事は後日させていただくということではいかがでしょうか」

驚きながら課長が茶碗を置く。返事を待つ事なくかなり強い視線を夏子に向ける。

「この話、聞いていたか？」

夏子は少し間を置く。その分を取り返すかのように首を強く横に振ってから答える。

「いいえ」

ゆっくりと視線を課長に戻して続ける。

「改めて広報課に赴きご返事をさせていただきます。今日のところは……」

意を決して立ち上がると身体ごと課長に頭を下げる。守は何とか場の主導権を握った。思わぬ対応に課長は黙ったまま。

「つまりぬ会社ですが、折角お越しいただいたので社内見学でも……もちろん、時間が許せば

ですが」

夏子が慌てて名刺を取り出すと課長に近づく。

「守夏子と申します。よろしかったら……どうぞ、こちらへ」

肩書きがないのか名前まで告げる。課長は立ち上がって守に一礼してから夏子に手招きされるとドアに向かう。何とも言えない夏子の美しい後ろ姿……シワだらけの背広が哀れに見える課長に声を掛ける。

「駐車場で待機します」

課長の姿が消えると同時に守が近づいてくる。

「二世」

部屋を出ようとする肩に手がかかる。二人しかいない。俺は鞆から分厚い封筒を取り出す。「断るつもりでいる。それよりも……」

守は一旦、言葉を切ってハンカチで額の汗を拭きながら正面に立つ。

「どう言ったらいいのか……」

次の瞬間、屈んで土下座する。俺は驚きのあまり何も言えない。

「話を聞いてくれないか？ 頼む！ このとおりだ」

——このために俺はここに来なければならなかったのか
ぎこちなく守が立ち上がる。すべてが過去になった今、言い訳さえすれば胸のつかえが取れ

ると思っている……俺はドアに向かう。

「待ってくれ」

追い越すとドアをロックして俺の前に立つ。

「話を聞いてくれ」

「始めからそうすれば良かった。後味が悪すぎる」

ドアロックを外そうとする俺の手を握って引かない。立ったままの会話が始まる。

「神戸のコンサート以来、迷惑ばかり掛けていつも助けてもらったなあ」

もう一度ハンカチで額の汗を拭う。思い出話で距離を詰めようとするのは常套手段。でも脳裏には写真集を忙しそうに売りさばく美英子の顔が浮かぶ。

「あの時、夏子から事情を説明させるつもりやった……」

俺は懐かしい窓の外の景色に視線を逃そうとする。ところが何と窓ガラスに視線が阻まれてそこにうつすらと過去が写り始める。

*

大舞台を持つ神戸学生会館の楽屋はそれなりの設備を持つ。メイク室や着替室などそれぞれ五、六部屋以上、男女別のシャワー室やトイレや補助室も複数ある。とは言ってもそれぞれの部屋（トイレとシャワー室を除いて）は低いドアあるいはカーテンで仕切られている程度で視線は遮られるが開放的。もちろん関係者以外は楽屋に出入りできない。

着替室で守と夏子が話し込む。会話はセリフの練習にしか聞こえないから気にかける者はいない。やがて話がまとまり部屋を出る二人。すると近くでドアが閉まる音がした。

「春夜に聞かれていた。狼狽したが打合わせどおり夏子は照明室で二世に……」
俺は遮る。

「お前が、言えばいい話やないか。何故……」

だが、守は持論を展開する。

「……その時は僕は春夜を、夏子はお宅を、説得と言おうか……今、思えば……」

なぜ夏子は守の指示に従ったのか。何らかの事情が……今度は春夜の顔が浮かぶ。

「シヨックやったやろうな」

ガードを下げてしまう。それを見越したのか、守は大きく息を吸ってから、今度は春夜を避けて夏子との経緯を吐露し始める。

「夏子がお宅から離れたのは……」

一気に緊張する。見たくなければ目を閉じればいいが、聞きたくなくても耳は閉じられない。

「あれから四年。お宅と夏子が別れたほんの数日前、万博を盛り上げる名目の会合……懇親会で……」

それは政治家の資金集めの立食パーティだった。業界の経営者はもちろんのこと後継者なり政治家も子息を出席させる。そんな会場で守と夏子が談笑するのは自然な事だ。ところが突然

夏子がワイン・グラスを落として口を押さえた。この光景は頭の中で鮮明なまでの像を結ぶ。

「妊娠してたんか！」

守は黙って頷く。

あの頃の夏子には様々な事が起こった。実母が亡くなり自分が養女と気付いた事。養母が入院した事。だから生理が止まっても不順だと思つたのだろう。しかし、選りに選つて、政治家主催のパーティで二人が一緒だったなんて……偶然がまるで生き物のように自由奔放に動いて因果を次々と創つていく。俺と守が友達になつた切つ掛けも友情が消滅する切つ掛けも、偶然が創つたものだった。

夏子は父親に俺を内緒にしなかつたが会つた事はない。父親が不在の時だけ家に招いた。恐らく俺にいい印象を持っていないと思つたのだろう。しかし、年賀状や出張先から出した絵葉書で名前ぐらいは知っていたはず。いや、むしろ興味津々だったはず。

守は衣服を汚してしゃがみ込んだ夏子を抱きかかえて休憩室に連れて行つた時、飛び込んできた父親に何故名刺を渡した？

「君か！ 夏子と付き合っていたのは。すぐ結婚しなさい！」

*

守を押し倒して社長室を出た。どこをどう走り抜けたのかは覚えていない。気がつけば地下駐車場にいた。すぐ分厚い封筒を持った守が息を切らせて現れる。

その十四 再会

「二世！」

キーを付けたままの車に乗り込むとエンジンをかける。守とは反対側から夏子と課長が駐車場に入ってくる。

「夏子！」

守の叫び声に夏子はただ立ち尽くす。異変に気付く事なく能天気な課長は乗り込んでくる。間一髪、モリ・P Rから離脱した。

最大の疑問は夏子自身。なぜ父親に説明しなかった。明らかに誤解じゃないか。それよりお腹の子をどうするつもりだったのか。仮に夏子が勘当されて養子縁組を解消されても、それはそれだ。

確かに養女としての負い目はある。同じ境遇だった冬見を思い出す。それでも冬見は妊娠するために身を捧げた。

——そう「もらわれた」

妊娠したのなら俺は喜んで生まれてきた子を夏子と一緒に育てる。事実上の夫婦になるから当然だ。

夏子は守と俺の関係まで知らないとしても、俺がモリ・P Rという会社に勤めていた事は知っていた。パーティ事件後には俺たちが親友である事も知ったはず。当然守は夏子と俺の関係を知っている。

——なんで二人は引っ付いた？

結婚するしかなかった？ 誤解が切っ掛けでも結婚する？ わずかな時間で愛し合える？
場所が場所だけに何も言えなかった？ 世間体？ 結婚を引き延ばして何とかしようと考
えた？ 俺が恋人をつくって気が紛れるまで待っていた……二人が解決策を模索した形跡はな
い。

俺は夏子を忘れるために他の女子と深く付き合う事はしなかった。もちろんモテないのが原
因だが、それほど夏子との恋は強烈だったし甲斐性がないことにも気付いたからだ。

もちろん夏子と恋に落ちた時、俺に甲斐性はなかった。でも夏子は受け入れた。そして妊娠
した。それを口実に俺と一緒にしろとしたのか。でも、結果から見るとそうではない。一緒
に戸隠奥社に参拝して将来を誓いあったのに。

空を切る俺の気持ちをよそに初恋の相手が親友と一緒に俺を追い詰める。

*

知秋と春夜。この二人は逃避せずに失意の痛手を回避した。結婚した知秋はともかく感心す
るのは春夜。楽屋で守と夏子の話を聞いた時、どんな気持ちだったのか。以前から薄々感じて
いたらしいと守が言っていたが、それでもショックだったはず。しかし、春夜は普段とひとつも
変わらずに演奏し終えた。少なくとも俺にはそう聞こえた。

そしてコンサート終了後の内輪のパーティーで、乾杯を済ませると一言「さようなら」と告げ

て去つたらしい。あえて俺をパーティーに呼ばなかった理由が何となく分かった。その後春夜はイタリアへバイオリン留学してすぐさま国際コンクールで優勝を逃したが二位入賞した。

——春夜は失恋したんじゃない

少し違うが、あの台湾人モデル。今や世界が注目するトップモデルになった。

——完全燃焼！

この二人は今も燃え続けている。チャンスが何度もあるわけではないし、一瞬、一瞬の完全燃焼だから、とにかく前に、前に進まなければ意味がない。

今でも確信している。守キリに対しても、夏子に対しても、俺自身は完全燃焼であつたと……しかし、完全燃焼が途絶えた今、燃え尽きた事になる……完全燃焼さえすればと、自分を勇気づけて生きていこうと……完全燃焼の中にこそ永遠なるものがあると確信したけど。

なんと言う事はない。燃え尽きたのではなく燃え損ねてくすぶっていただけ。煙にむせて涙を流しているに過ぎない。ほんの少し大人に近づいただけ。いや、酒に強くなっただけ。結局、酔っ払いの戯言。

気が付けば万年床で倒れていた。